



第 3 3 号

平成十年

(1998)

10月15日発行

(年4回発行)

「軽み」と現代連句

東明雅

桐の木高く月さゆる也

野坡

門しめてだまつて寝たる面白さ 芭蕉  
「炭俵」(元禄七年刊)の「梅が香に」の巻  
に出てこの付合について、芭蕉は「炭俵」  
の「軽み」の風調は、この「門しめて」の一  
句でしっかりした自信を持つ事が出来たと  
言、同じ「炭俵」の中の秀逸として、弟子た  
ちが一樣に推賞した

はつち坊主を上へあがらす 利牛

泣事のひそかに出来し浅茅生に 芭蕉  
という付合に対しては、それは自分が考  
えている新しいものとは違うと言ったと「三冊子」  
に書かれている。

軽みとは、用語、句体の平明・卑近を狙う  
だけでなく、一句の中に和歌的・連歌的な情  
趣・志向をすて、庶民の通俗生の中に新し

い詩を求めようとするものである事は、既に  
諸家の指摘しておられる通りである。

弟子たちが推賞した付合のはつち坊主とは  
托鉢坊主のこと、普段なら多少の寄進をして  
追い払う托鉢僧を家の中に呼び入れるとは、  
何か特別な理由が考えられるところである。

芭蕉はその前句に対して、人知れず甲い  
しなればならぬ事が起った茅屋を付けた。

浅茅生とは、ただ単に茅のまばらに生えて  
いる所ではなくて、「いとゞしく虫の音しげ

き浅茅生に露おきそふる雲の上人」(源氏物  
語、桐壺の巻)をひくまでもなく、何かい  
わのある人が住んで、悲しい事のおこって  
いるのを暗示している。いかにも浪漫的で物語

的で、そのころまだ、「冬の日」・「猿蓑」  
の境地にさまよっていた門人たちがこの付け

を一齐に賞賛したのも当然であろう。

芭蕉はこの時、門人とは別に、「軽み」と  
いう新しい俳諧の理念を求めていた。「泣事

の」の句は、前句との付味はずばらしい。そ  
れは作者も認めたところであろう。ただ、そ  
れはあまりに浪漫的で、物語的で、「さび」

・「しおり」の香にみちみちたものである。

「門しめて」の句、前句は「桐の木高く月  
さゆる也」である。この「月さゆる也」の也

の字に寒月を詠嘆賞美する情が見えるとして、  
そこに情をおこし、風流隠逸の人を付けたと

するのが従来の解釈であった。しかし、その  
ような人物ならば、まさにそれは「冬の日」

時代の風狂の人の再来で、「軽み」の付けと  
は言えぬであろう。

そうではなくて、すっかり葉を落した桐の  
木が高く聳え、それを余所にひっそりと門口  
を閉ざし、黙々と寝所に入るのを楽しく思い、  
快く思っている人は決してしかつめらしい風

狂の人ではなくて、その辺の町裏にも長屋に  
も住んでいる八さん熊さんであり、張三で

あり、李四であった。折角、照っている月を  
見すて、ぬくぬくと寝所に入るのを楽しむ

のは俗情でもあろう。しかし俗情であらうが  
なからうが、その人たちにとっては偽りも飾

りもない真情であるし、それを写すのが「軽  
み」の付けである。

芭蕉の連句はいわば世態人情諷交詩である  
と私は考える。それは「冬の日」時代、「猿

蓑」時代の作品についても言えるところであ  
らうが、「炭俵」の軽みに至って、始めて古

典古語にとらわれず、伝統にもとらわれず、  
本当に庶民の言葉によって、庶民の世態・人

情を生き生きと描き出すことが出来、そこに  
は大きな意味で人の世のあわれとおかしみを

とらえることが出来たのである。

現代の連句においても、「軽み」は尊重さ  
れ、推奨されているが、まだ「軽み」を十分

に使いこなした秀作にはお目にかかっていな  
いような気がする。現代連句の進むべき一  
つの方向がここにあるのではなからうか。

徳岡 久生

K・Hさま

お手紙、頂いて以来再読三読、お返事の糸口をつかめずにおろおろしております。むしろ私の方こそお尋ねしたい間でした。

俳と詩との関係。それは、古典時代からの悩ましい問題であるように私には思えます。

「詩歌連俳はともに風雅なり」（『三冊子』白雙紙）と言うとき、土芳および同時代人の脳裏の「詩」は漢詩であったにしても、この四種の言語芸術をまとめて呼ぶジャンル名をもたずに来た私たちこの島民族は不幸なのか、幸せなのか、よくわかりません。「風雅」とは、ひどく情念的な、規定しづらいテクニカル・チームです。

でも、あえてそれを「日常性からはみ出さずれこんで異化する表現への志向」「詩精神」などと読み替えることが許されれば、広義での詩と俳との関係の如何は、もう元禄―宝永の交に答えられてしまっている、とも言えそうな気がいたします。

ただ、そうした大きな括りの中で、俳人たちは自らの表現形式とは別種の存在として狭義の「詩」——古典期に漢詩、近代以降は欧米の詩やその影響下に成立発展した日本の近現代詩——を意識し続けてきたのでしょうか。

そのこともまた、幸せなのか不幸なのか、私にはわかりません。

史上、顕著に二度、「詩」は、俳諧の頹落からの超出手だてとされました。「次韻」「虚栗」期の芭蕉と、〈離俗論〉の蕪村によって。「高く心を悟りて俗に帰るべし」と土芳が伝える芭蕉の教えと「俳諧は俗語を用て俗を離るるを尚ぶ」（『春泥句集序』）という蕪村の主張の間には、両者の句境のありようを考えれば単純に同じことの表裏とは言えない、微妙で深刻な違いはあるにしましても。

その蕪村の残した「北寿老仙を悼む」などの清新な自由詩は、蕉門の支考が興した美濃派の仮名詩や、江戸座系の俳詩の試行的諸作品を先行させて出現したものとか。で、私はつい、むなしく夢想します。維新政府による性急な欧米化政策がなかったとしたら、日本の近代詩はいずれ、俳の世界から孵化し成長するはずではなかったのか、と。

すぐれた俳句は、イメージの動き象徴性の高さで「詩」を撃つものがあります。イメージの詩人エズラ・パウンドが俳句に強く影響されたことは、研究者がみな言及しておいでです。そうして、そのイメージの影響を少なからず受けた日本の近現代詩へ、俳人たちが熱い眼差しを向けたことがやはり二度あるようです。昭和初期の新興俳句と同三十年代の前衛俳句の、二つの運動。

第三波が最現代の今、なのででしょうか。復

活著しく、流行して裾野を広げているらしい連句の世界を含めて、詩と俳との問題がまたあらためて浮上してきているように思えます。お手紙にあるとおり、現代詩の呼吸そのものの歌仙が巻かれる一方、詩の側からは限りなく無季自由律の俳句に近い一行詩や、連句の試みが提出されているという状況があるのですね。

詩を、次行が前行を相対化し異化してゆく刻々の孤独な作業によって、〈此処〉から〈此処ならぬところ〉へ超え出る営為だと言つてよければ、詩人にとって連句は、もしかすると羨望と否認の両価感情を喚起する文芸形式かもしれない。そこでは、個の一行は他の個によって、軽やかに強かにか異化されてゆき、結果としてたとえば三十六行の超条理世界が現出する……。逆に、連句びとが現代詩に等質感をもつのも、だとすれば当然なのでしょう。

ただ、他者による必然的な異化が連句の大きな特色ならば、一座する各人が我が一行の「詩」性を競合することに終始すると、作品を難渋で息苦しいものにし、全体の相貌をかえって瘦せさせる場合もあるのではないのでしょうか。それが、少し気になっております。不勉強で、とうてい現代作品の実例を挙げながら何かを言う力はなく、ちらちらとかすめる思いを未整理のまま書き連ねるに終わりました。乱簡、お許しを。（詩人）

## 横書き無作法連句

日下 悟乃

感性もさることながら、文字が下手なことを恥じています。ならば、上達すべく努力すれば良いのですが、ズボラな私はワープロという逃げ道を選択しました。その延長上にパソコンがあります。購入したものの、その操作も良くわからず、「パソコン通信」ならヲタクめいた方々が沢山いて、教えてくれるだろうと、その世界へ入りました。見込みは当って、なんとか操作に不便は感じなくなりましたが、それ以上に、通信仲間との交流のほうへ興味が移っておりました。

「連句というものがあるらしいよ」と仲間からメールが来たのは、九三年頃だったでしょうか。メール相手はちょっとだけ俳句をやっている、自作句を季語などで分類・整理するのに困っていたようです。手書きの小短冊を部屋一杯に広げ、手作業でやっていた、そのことに難渋しているということでした。で、私がワープロを薦めたのでした。ワープロなら、字句の訂正や句の順番入替は勿論、検索も容易だからです。ただ、私がパソコンに触れた時と同様、操作はマニュアルだけでは当然分かり難いこともあり、度々電話で問い合わせが来るようになりました。私とてそう詳しいわけはなく、それならば詳しい方が沢

山居る「パソコン通信」に來れば良いと助言しました。案の定、それで編集作業は格段に能率良くなったようで、操作問い合わせの電話からも開放されたわけです。

連句は独吟という手もあるでしょうが、やはり同じ程度の学習相手が欲しいのもしれません。そんなことから始めたものですから、私にとって、連句は「パソコンの画面上に横書きに書かれたもので上から下へスクロールする」ものでありました。しかも、付句を考える場合はその前を離れ、ベランダか台所の換気扇の下に立つ。つまり、煙草を吸いながら考える悪癖も付いてしまいました。

ほどなく、諸先輩連衆にも恵まれ、実際の座に参加させて頂くこともありますが、そんな折に頭を過ぎるのは、換気扇の下に立ちたい欲求と、字がもう少し上手なら、一割程度は良く見えるのではないだろうか。己の才の無さを棚上げしてのことではあります。

候補句はさすがに小短冊に縦書きで拙い句ながら提出しますが、手控えのノートは横書きのままにしています。会の後にパソコンに打ち込んで記録するのに便利だからと、横書きのほうが見慣れたものだからです。現在、通信仲間にも連句に興味を持つ方が若干増えつつあります。それらの方の中には、私と同じように横書きで連句を考えてしまう人や、煙草を吸いながらでない、句が思い浮かばないという方が居ないとも限りません。

ナンコ

植草 士郎

法事で鹿兒島に帰った折、夜ふけて男達がナンコというものをやりだした。亡くなった「ナンコ名人」を偲ぼうという思いと、遠路戻って来た私に郷土の遊びを仕込みたいという思い付きもあったのだろう。

割箸を半分折ったくらいの棒を数本用意し、手の中に包み込んで、それを当て合うのである。ゲタンハ（下駄の齒Ⅱ本）、ゲタンメ（下駄の目Ⅲ本）などと全く嬉しそうにやっている。1本の時は、テンノーヘーカと言ったようだ。負けると罰盃で焼酎を飲まされる。ちゃんと教わりたかったが、向こうもこちらも出来上がっており、掛け合いの呼吸も独特で、結局マスターできなかつた。

談林の人々が巻いた「大阪独吟集」の中に、  
かるたのまんをくるよしもがな

おそらくはなんごうならば一こぶし  
もつてまいらふさかづきの影

というのを見つけた時は嬉しかった。「なんごう」は「なんこ」のことだろう。

私たちの小さい頃はナンコは親父たちだけの遊びだったと記憶しているが、当日の晩は女性も一人加わっていて、勘のいいこの女性に男どもはコテンパンにやられた。

今は額縁に納まってしまった仏頂面のナンコ名人の咳払いが聞こえてきそうだった。

小林千雪様のこと

倉本 路子

朱槩の香諸手に包みきれざりき 千雪  
いつの頃でしたか、千雪様が初めて家へ来て下さった時、郷里から届いたザボンを差し上げた間もなく「寒雷」誌上にこんな句が載りました。是非短冊にと何度かお願いしましたが、謙虚な彼女は「私の字など・・」と仰ってとうとう書いて頂けませんでした。

千雪様には尊敬して已まないすてきなご主人様がいらしたのです。次の世もときと思っ  
ていらしたことでしょう。彼女の声が聞こえる様です。「クラモツさん（千雪様は私のことこう呼ばれました）、今毎日二人で天国の公園をのんびり歩いています。いろいろなお花の名前を、パパちゃんに教え乍ら・・。とても合わせですよ」と。

佛やうすむらさきの花菖蒲

路子

昭和四十九年新宿の三角ビルに朝日カルチャーセンターが開講された時、加藤楸邨俳句教室でお逢いしたのが始まりでした。それからいつも一緒に俳句や連句、果はお見合いのお世話まで四半世紀に及ぶお付き合いでした。カルチャー教室では、猫養会の秋元正江様、坂本孝子様、中田あかり様、村田富美様、水鳥ますみ様方とも一緒でした。小林節子（彼女の呼び名）というお名前が二人いらしたので、「千雪」という書道の号を「ちゆき」と読んで俳号になさいましたが、とてもよく似合っていました。

然し千雪様が御病気になられ、「進行の早い上顎癌なの、でも手術はしないで自然食療法で直します」ときっぱり仰った時、私などはとても及びもつかない芯の強い方なのだとしみじみ感じました。それはそうですね、東京の弁護士夫人の会の会長を何期も勤められたほどの方ですもの。

何方にも優しく、心遣いが行届いて、裏表のない素直な美しい心の持主でした。俳句も銜いのない正直な御句で、それだけに人の心を打つ句でした。或る時私が「若し来世に私が男に生れたらあなたをお嫁さんにしたい」と申し上げたら笑っていらっしやいました。

一時はとても元氣になられ全快なさったかと思いましたが、御病気になられたご主人様の御看病も大変だったのでしょうか、お葬式も立派になさり、一周忌も済まされた頃からお疲れが出たのか、又体調を崩されてしまいました。御自身ではもう一度一からやりなおして元氣になると仰っていらっしやいましたが、この六月十九日帰らぬ人となられました。

病床でも最後まで作句を続けられました。

今年の「寒雷」六月号に載った最後の作品の中の一句を紹介させて頂き、心から御冥福をお祈り上げたいと思います。

決断を迫られてをり春の雷

千雪

〈連句の歳時記〉

『三冊子』に、「ほ句に三月に渡る景物出る時は、わきにて當季を定むべし」という一節があるが、猫養会ではこれは厳格に実践されている。このことは『吾妻問答』にも述べられていて、連歌時代からの心得ということがわかる。

発句に「秋裕」「渡り鳥」などの三秋の季語が使われた時、脇は「こおろぎ」「木の実」といった同じ三秋の季語ではなく、「萩（初秋）」「落鮎（仲秋）」などと、「當季」を定めて詠むように、という指示である。

又、季戻りを防ぐということもあって、連句で使う歳時記には「初・仲・晩・三」の分類が必須だが、しかし、この分類も各歳時記によってまちまちなところがあり、結局は作者（捌き）の判断にゆだねられる場合が多い。右に挙げた季語も実はそうした例である。

季語	角川	文芸春秋社	平凡社	講談社
秋裕	仲秋	三秋	仲秋	仲秋
渡り鳥	仲秋	三秋	仲秋	三秋
三日月	仲秋	三秋	仲秋	仲秋
こおろぎ	初秋	三秋	初秋	三秋
木の実	晩秋	三秋	晩秋	三秋

（出版社名は依った歳時記があるところ）  
歳時記の分類の機械的な適用ではなく、その異同にこだわるのは、案外新しい詩の発見にもつながることかも知れない。

（ほ）

猫養同人会

歌仙「六月の空」

浅賀淑代 捌

六月の空はにびいる万華鏡  
 水に触れつつ舞へる夏蝶  
 パソコンに開発試案スキャンして  
 いつも飲めまず熱い珈琲  
 高速路右に左に良夜なり  
 渡りの鳥の名を教へやる  
 活気づく島の精油所椿熱れ  
 金庫の鍵を開ける名人  
 結界に座るにすこし粋すぎる  
 喪明けを待たず送る恋文  
 今週のラッキーナンバー0と8  
 サッカー騒ぎちよつと寝不足  
 弦月に城の火の番交代す  
 伯爵領に犬の遠吠え  
 中世史フィールドワークはかどりて  
 こんぺいとうをこぼす掌  
 滝桜三春の里の花の昼  
 オルガンの上うすき黄塵  
 やどかりにピントを合はせ波にぬれ  
 西郷どんの長き嘆息  
 世紀末まだ戦争をやめぬ国  
 座長を待たせ上げるシナリオ  
 羅を鋼の如く着こなして  
 蛇の寝莫産をのべて客とる  
 美しき乳房持ちたる森の精  
 おーろら号の湊出る刻

淑代 庸子 瑞枝 麻子 達子 枝 麻 庸 枝 庸 庸 麻 達 庸 麻 枝 庸 麻 庸 枝 庸 麻 同 枝 同

時は今ダーツでねらふ望の月

ドライシエリーをさはやかに干し

海覇の鑄型を積める工場

足弱となりてうらめし駅階段

灰皿見ればたばこ取り出し

何となく野良は餌場をわたりゆき

声を揃へて平家読む家

一炊の夢の醒むれば花霏々と

めかる蛙のひそむあひの谷

平成十年六月十七日 於 高木盆栽美術館

連衆 久保田庸子 大窪瑞枝 内田麻子

篠原達子

歌仙「沙羅の花」 おおたけんのすけ 捌

惜しまれて散り急ぐなり沙羅の花

ふと微かなる逝く夏の声

新刊書父は書齋に積むならん

壁いっばいに掛ける猫の絵

大都会高きに住みて今日の月

糸瓜の水をためる空き瓶

「BONSAI」のポスターさやかパリの路地恵

フランソワーズ残す歯ブラシ

抱擁も左ぎつちよはぎこちなく

円帽かぶる大司祭様

やんちゃ子のやぶれズボンのアップリケ道

同 庸 枝 達 麻 代 麻 達 麻 同 枝 同

明雅 道子 弘子 美恵 篤子 けんのすけ 篤 恵 雅

サッカーが好きラグビーが好き

ここよりは駿河の月ぞ影牙ゆる

自転車を部品新たに組み直し

ちょっと一杯浅蜷蛤

花万朶いつものやうに母の忌を

香の薫れる風光る中

メーデーの列の伸びたり縮んだり

消費落ち込み誰がもうける

地下鉄の出口またもや間違へて

ビタミンドが少し足りない

夏瘦せの人間関係失調症

蝉の抜け殻木々の根本に

フェロモンを撒き散らしては帰る夫

卵子いただき精子いただき

のほほんど飲むのほほんの缶のお茶

せつせと幹を叩く啄木鳥

月影にティンカーベルが飛んでゆき

踊るも阿呆踊らぬも阿呆

新蕎麦に故郷人はなべて老い

島々巡る健診の船

煙草屋も宅急便の旗立てて

春のみかんをおすそわけする

関守の夢に立ちたる花の精

やっと手を出し群れあそぶ蛸蚪

平成十年六月十七日 於 高木盆栽美術館

連衆 東明雅 加藤道子 市野沢弘子

山口美恵 穴沢篤子

弘 道 恵 篤 雅 弘 道 恵 篤 道 弘 雅 篤 道 弘 恵 篤 道 弘

同 庸 枝 達 麻 代 麻 達 麻 同 枝 同

歌仙「御行松」

五味蓉子捌

御行松踏まむ天地や梅雨のビル

蓉子

影も涼しき染付の鉢

久美子

夏帽子山の斜面に続きゐて

郁子

誰が吹くのかオカリナの曲

路子

スタンドを消して月光招き入れ

利子

夜なべ片付け三毛に頬すり

政志

賑やかに万聖節の假装の子

郁

ポケベル暗号ふたりのみ知る

路

同棲は誰にも内緒緘口令

久

男同志の炊事洗濯

路

鱈を豊漁にする時化の海

利

寒味噌ねむる蔵に有明

久

開通のリゾートルードぶっ飛ばし

志

「あらしやりませぬ」片手運転

路

表裏茶道の妻の裏表

久

うなされて尚夢占が好き

志

大石を見事に割りて花一樹

郁

判官最良揃ふ開帳

志

熟練の鋏がおどる剪毛期

利

モンゴル高原股のぞきして

同

風葬の骨さらさらと動きたる

久

吉田正の永遠の名曲

利

大吟醸奨めてそっとにじり寄り

郁

恋の泉の淵に溺るる

路

桜桃忌斜陽ふたたび読み返し

郁

シュークリームの甘さほんのり

久

善戦の言葉悲しきW杯

志

あとほど上手い寄席の噺家

路

月肅核実験の報を聞く

志

鳴くや鳴かずや蚯蚓糞虫

郁

分けくれし知らぬが仏天狗茸

利

いつまで続く缶蹴りの鬼

路

古い集ひ昔話をりハビりに

利

鴉下り来て雀逃げ散る

久

欲と得見尽くせし世の花万朶

蓉

野に出で立てば清し春の香

志

平成十年六月十七日 於 高木盆栽美術館

連衆 副島久美子 東郁子 倉本路子

梅田利子 峯田政志

歌仙「白砂青松」

佐藤世止彌捌

見遙かす白砂青松夏の波

世止彌

初蠅のとぎれ鳴く声

敦子

貴賓室卓のレースのこまやかに

千町

壁絵のゆがみ一寸直して

清子

三々五々帰り来る兎を照らす月

美津

ふつつたぎるきりたんぼ鍋

町

のれん分けし馴染にすすむ新走り

淳

少し揺れたる胸の十字架

清

フリーガン敵同士が恋に墮ち

彌

空港の椅子抱き合ひて明け

淳

吹雪止み氷輪清に現るる

町

庭籠して年賀賑やか

津

今昔のいまも座右の方丈記

清

核を保持する国はいくつぞ

町

参院選間近くなれば愛想よき

淳

カード占ひ魔女とデーモン

清

神よりも人を信じて花の下

同

鮎子釘煮母の手造り

淳

春スキー予定組んでは崩されて

津

図書館ポストどきと返本

町

川渡り「かの子」生家の前を過ぐ

淳

山の尼寺お布施届きぬ

清

くちなはのとぐる巻きたる蔵の隅

町

心中騒ぎ徹夜搜索

津

暖炉の火ふたつ肌えに仄めきぬ

町

UV商品馬鹿に売れてる

清

世紀末おどろおどろの物語

津

種のふくべを振ればカラカラ

清

赤き月さしむ薬屋の縁に見し

淳

漸寒の温泉に病癒す娘

町

旅硯懐紙大切俳諧師

清

アポリジニより買ひし彫り物

町

トロイメライ・ピアノレッスン繰返す

同

鞆いっぱい少年の夢

清

滝桜花の盛りに人集ふ

彌

鳥の飛び立つかけろふの丘

清

平成十年六月十七日 於 高木盆栽美術館

連衆 上月淳子 原田千町 下鉢清子

桑原美津

歌仙「老松」

椿 紀子 捌

老松に何を聞かばや庭涼し

紀子

瀬音はこべる六月の風

和代

新鮮な牛乳配達村々に

あかり

スポーツ面を真っ先に読む

シズ

玉環を見事に映すリトグラフ

好敏

日展審査紫煙流るる

一恵

網張って鳥屋師の動き忍びやか

り

野暮な男のくどき長々

代

お前さん鏡見たことあるのかい

恵

円の相場は下がりっぱなしで

ズ

行く水の流れも知らず方丈記

敏

鍋は河豚より鯨鯨が好き

同

遠火事を望む手すりを照らす月

り

力持ちなる細き両親

恵

モロッコの砂にまみれし生計とて

り

岬の丘に立てる教会

ズ

はらはらと花散る中の白昼夢

同

春の蚤飼ふホームレスなり

代

のどらかにチェロのリードの四重奏

敏

薩摩切子の盃を廻して

代

あまばじよが怖いと泣いた幼き日

り

から傘をどり同じ顔ぶれ

恵

張込みの刑事があくび噛み殺し

り

遺伝子乱す環境ホルモン

敏

蓑虫のふらりと揺れて待ち呆け

ズ

襟替への君まるめるの巴里

敏

クリムトの金のキッスに月青し

代

こっそり覗くでぶの商人

恵

断髪し陽気な酒の広告に

敏

猫がじゃれつく茎漬の樽

り

病院の窓明け放ち鬼やらひ

代

四人集めて麻雀をする

恵

リタイヤの後は世界を船の旅

同

園長先生習ふオカリナ

ズ

この花は自分のものと思ふ朝

紀

角を曲がれば陽炎の町

執筆

\*薩摩弁のお化け

平成十年六月十七日 於 高木盆栽美術館

連衆 長崎和代 中田あかり 小野シズ

豊田好敏 山崎一恵

歌仙「五葉松」

松本 碧 捌

市ヶ谷や小さき緑陰五葉松

碧

糸の長さがゆれる薬玉

安子

納涼の映画場所取り急ぐらん

和子

ポップコーンを運ぶ両手に

志げ子

飛機は今着陸姿勢月照らす

智恵

休暇明けなる留学の吾兒

和

新走り比丘尼まるらす酒升々

げ

ちよっと鼻声すれすれの術

恵

失神をしたふり乗った救急車

安

方向音痴迷ふ六道

げ

ザンビアで本社勤めの辞令受け

安

備長炭を風呂にポットに

恵

鶴渡る月に望遠据えしまま

和

募金集めて地雷の撤去

げ

栄誉章異国の丘の吉田節

恵

無煙の竈飽食の民

げ

金銀に縫ひの振袖花衣

安

炉の名残りとして香をききをり

和

武田菱天覧馬術うららけし

げ

のり移りたるご先祖の霊

和

ロビーでは自動ピアノがレクイエム

安

旅に会ひたり生るる蠅螂

恵

角乗りのおきゃんな娘紺ばっち

安

投げた御祝儀胸の谷間に

和

気弱なるボクは爪噛みはや定年

碧

介護保険は難解と知る

げ

鮭風番屋出払ひ欠け茶碗

恵

氏神様に瓢箪たわわに

碧

大道具モダンアートも月は月

げ

顔見世風につくり白塗り

和

麻雀はまたも八百長ご接待

恵

積み込み元禄自由自在で

安

貸し農園欲ばりすぎる多種過密

げ

綱引きのコツ腰を上げさせ

安

曳く舟も曳かるる舟も花を浴び

碧

野遊びついで句碑の拓本

恵

平成十年六月十七日 於 高木盆栽美術館

連衆 神谷安子 式田和子 蒲原志げ子

須田智恵

歌仙「夏椿」

吉村あみこ 捌

鉢に生ひ大樹の影や夏椿

あみこ

水石脇に滴りの庭

壽子

単衣着るハミング軽く続けるて

文子

三分料理味は薄味

秀樹

潮風の高層団地月昇る

孝子

少年の駆るバイク爽やか

澄子

剝跡に白粉刷きて盆狂言

孝

ねばりつくよな声に口説かれ

文

倒産の夜逃げにひそと蹤いて来る

孝

気儘でおしゃれご自慢の猫

澄

凡才もまぐれでトップ模擬テスト

壽

富士の裾野に冬霞立ち

樹

北斎の竜が睨みし寒の月

文

拙者いささか酩酊に候

文

萎えがちの五臓六腑を愛しみて

樹

タロット捌く鳩の来る窓

壽

花の房揺るる間より観覧車

同

ひねもす点となりて畑打つ

澄

万巻の書に埋もれて弥生尽

文

パイプ燻らしジャズピアノ弾き

樹

アフリカの土地に馴染みし商社マン

壽

信じる神がもとの内紛

孝

粉雪は森の中から湧くやうに

同

マント深々赤頭巾ちゃん行く

澄

絶倫の葉が効いて無理重ね

孝

方向音痴老いらくの恋

樹

夕映は紫となり野は暮れて

孝

月と語らふ鬼瓦なり

総代の庫裏を手伝ふ小重陽

あんなこんなで身に入みる頃

運動会めざす餡ぱん喰はれけり

政界の地図すでに混迷

魚泳ぐ水族館のアーチぬけ

耳元に来て唸る姫蛇

写せしは花か卑弥呼か古代鏡

後円墳をつつむ陽炎

平成十年六月十七日 於 高木盆栽美術館

連衆 杉山壽子 橘文子 青木秀樹

坂本孝子 八角澄子

猫養連旬会

歌仙「花芭蕉」

膝送り

俳諧は付け即転じ花芭蕉

灯もとめ薄翅蜉蝣

男あり海峡をゆく子を連れて

掘り出したる縄文の壺

濁酒唇のはしなめまはし

錫着に月の車座

団栗の独楽は廻るも廻らぬも

樹に耳寄せて僕は樹を聴く

台本の恋人の役もぎり取り

ふたりだけには解ける暗号

碧い瞳の国で十勝バッテリー

すっかり馴れたアボガドの寿司

織月を渡る寒鴉の貌をして

総裁選は又も迷宮

消費税5%が数へよく

そこなお遍路ちよいと待たれい

花の本俄仕立の盆手前

野馬立つ沢に河童太郎が

あたたかに下着ファッションくり出して順

透視能力もったマジシャン

夢の世に思惟する我とせぬ我と

どんでん返し無罪判決

ごきぶりがアルカトラスを飛んでるよ

抱かれて寝兒つくづくと見る

後朝のgayの化粧に髭まだら

おかるの役は誰であったか

ずずいーと次の世紀の幕を明け

糸瓜の忌には喇叭を吹かう

風まかせ波まかせにて月の旅

猫が前足すくめうそ寒

傘齢の医師忽ち呆け出して

淡々描く絵てがみの彩

追信は鏡の国のアリスより

きのふけふとは思はぬ転勤

花万葉神に捧げる染卵

スマイルをする四囲の山々

\*サンフランシスコ湾にある脱獄不可能の島

平成十年七月十五日 於 江東区芭蕉記念館

連衆 東明雅 梅田利子 小原洋一

和田順子 鈴木千恵子



歌仙「青柚」

内田麻子 捌

青柚の小指ほどなる玉固し

声朗らかに来る四十雀

夏休み炊き込み飯は大盛に

インターネット交はず通信

落成のビルの窓より上り月

百号作品出す美術展

牛祭飯面の寺僧ゆらゆらと

ぽんと渡さるボスのコーヒー

胸と腰誉めただけでもセクハラで

髭を伸ばして片思ひする

さざ波の湖面俄かに風の立ち

マッターホルン雪を頂く

弦月に照らされて行くアノラック

配流のごとき長期出張

酒瓶で趣味の細工も芸となり

金賞受く練切りの菓子

花万朶門閉ざされし武家屋敷

ホームレスにて蝶と戯る

レッスンは「仔犬のワルツ」春の空

成果実るや行儀見習

七半に足の届かぬもどかしさ

三十一文字はいつも字余り

御器嚙が最も好きな捨て麦酒

虫も殺さぬ顔で誘惑

S・Mの女王様は法学部

結婚式は地味にひっそり

町内のばばあ寄り寄り姦しく

孫のお下りルーズソックス  
終演の楽屋入口月細し  
忘れ団扇でさしずあれこれ

啓徳へ最後の旅かそぞろ寒  
携帯電話不意に鳴り出す

ペースメーカー入れてる人を労りて

総裁選び遂の混沌

御衣黄の花は遅咲き朝光に

辻の祠に在す古雛

平成十年七月十五日 於 江東区芭蕉記念館

連衆 橋文字 中村ふみ 神谷安子

佐古英子 今宮水壺

月踏みて丹波杜氏の参り候  
何時の間にやら盗む奥伝

推敲の果の原稿また反故に

沙翁の科白諳んじてゐる

花筏真中を分ける風の道

生れし蝶々森の寶石

国境の陽炎ぐり工作員

本業忘れボランティアして

ぎよっとさせどっと受けたる隠し芸

すぐ切れる子にすげえむかつく

ガス抜きのパンの膨らむ丑の刻

羅透けて見せる幽霊

流し目と鬻でかける金縛り

踊りませうと腕組まさる

公約はさておき派閥人事から

煙管の切符捨てる屑籠

箱屋敷増えて月さすターミナル

鯨飲せんとやや寒の連れ

喜遊曲犬と聞きをり銀杏散る

食物連鎖の果は土塊

窯出しの父は馴染みしつなぎ着て

ひとりトランプすんなりと吉

生涯に一度は見ねばならぬ花

跳ねる子供に逃げる風船

清

玲

男

満

同

男

清

男

代

玲

清

代

同

清

男

玲

清

同

満

男

枝

代

歌仙「夏の果」

蒲原志げ子 捌

読み捨て漫画捨場網棚

巳

二輪車を押しゆく月の凍坂を

同

ポール蹴り涙涙に夏の果

志げ子

へのへのと目鼻描きたい円い月

世

掘出物のカラオケの艶

同

ポンポンダリア咲き誇る頃

曉巳

樟脳残る秋捨着る

巳

横文字の多い訓辞をほがらかに

好

2DK借景の窓自慢して

美恵

本陣の刀自整へし菊枕

世

鸚鵡が呼べる電話番号

好

黒文字添へる抹茶羊羹

志世子

街道筋に幻の酒

世

帆船は花に染まりて憩ふらん

代

望の月流れ静もる峡深し

庸子

故郷と縁とだゆる幾年ぞ

同

海市をくぐりひょうたん島へ

代

深山茜の渡る釣り橋

巳

何時もジョーカーはづすトランプ

庸

物知りの博士うららに居眠りし

好

酸漿をならす口許よく動き

恵

花の座に伽羅燻きしむや幽かなる

世

人造人間五体脱走

好

シェフ好きになり過食症気味

巳

春宵沈吟連衆の夢

世

猫の目の様に党名変はる国

弘

プリントのタトウの名前書き替へて

恵

平成十年七月十五日於江東区芭蕉記念館

同

本地垂迹説いて客乗せ

淳

新発売の基地を見に行く

同

連衆 島村曉巳 山口美恵 秋山志世子

同

パイアグラ命をかけて飲みたがり

代

本郷の鰻暖に一葉居

庸

久保田庸子

代

背の古傷撫でさせてゐる

代

井戸端会議今も健在

巳

風が丘に茨みだれて

代

あさつての時効成立じっと待つ

好

ボーナスの恨みを月に語りかけ

世

フーガ追ひかけ終奏となる

好

若者等コスモノートで十三夜

代

かじけた猫もそっと家出か

巳

手ずれて寂びし忘れ扇の

好

そぞろ寒病の友の便り絶え

好

大太鼓街にくりだす救世軍

庸

旅を急げば鴟の高鳴き

好

肩書きのなき名刺すつきり

好

習はぬ経を孫のすらすら

世

月照らす稽古の弓を磨き居り

世

瑞垣に玉砂利に舞ふ花吹雪

世

旅プラン花の名所を総管めに

巳

句ひ立つごと若竹の風

淳子

春の日傘をそっとまはしぬ

淳

帽にさしたる山鳥の羽根

世

マンションの窓つるす靴下

淑代

定年の記念に買ひし将棋盤

代

淡雪は犬の尿に溶けゆきて

恵

豊穰の秋を祝へる公爵領

好子

瑞垣に玉砂利に舞ふ花吹雪

好

一短ばかり総理候補者

巳

今宵限りは身分忘れん

好

平成十年七月十五日於江東区芭蕉記念館

好

高額の三大テノールうざったい

恵

木の実が意志を持ってころがる

悟

連衆 佛淵健悟 浅賀淑代 谷部好子

悟

スパゲッティはペペロンチーノ

庸

モニターにバーチャルの恋ひたむきな

代

市野沢弘子

弘

風死して居眠るらしき吸血鬼

巳

「パウカワグチ」と叫ぶ実況

好

骨董屋皆が探すいい仕事

好

水鉄砲で誰を狙はん

世

仏壇に灯明を上げ祈る母

弘

古新聞に包む煎牡蠣

代

ストーカーいいえ貴女のサポーター

恵

古新聞に包む煎牡蠣

代

薬人形などで惚れておくれよ

巳

古新聞に包む煎牡蠣

代

骨董屋皆が探すいい仕事

恵

古新聞に包む煎牡蠣

代

歌仙「巴里祭」

坂本孝子 捌

人の世も地球も廻り巴里祭

孝子

優勝杯に沸騰の夏

慎二

藤の椅子植物図鑑繙きて

郁子

キャンデーの紙抽出にため

紀子

池の面の片割月の溶けさうに

景翠

さんま直送急ぐ陸橋

紀

吊し柿持って暮仇あらはれる

二

盗聴なども使ふ奥の手

孝

惚れぬいた歌舞伎役者はつれなくて

紀

旅で拾った粹なブロンド

翠

銀沙灘塵もとどめず月は牙え

郁

年の峠に座るものけ

紀

総裁を担ぐ派閥を操れり

翠

偶然が呼ぶツキも実力

二

伸びやかに少女の弾けるコンツェルト

郁

ねち巻鳥に起こさるる朝

紀

就中爛漫といふ花見酒

翠

機織りの郷遠く霞める

二

石鯨玉辻には子等の声溢れ

郁

洗礼受ける愛犬と吾

紀

森深き青の濃淡魁夷展

郁

淵の底よりあるるうたかた

紀

しみじみと肩寄せ合うて時雨傘

翠

過去は問はない夢の一とき

郁

フィリピーナその半生を仕送りに

翠

蚤にくはれし痕もせつなく

二

茄子の味汁の実によし焼いてよし

同

いつの間にやら溜るファックス

郁

月更けて童話の象のひとり言

紀

夜寒の床におこる通風

孝

俳諧の付け即転じ身に入みて

郁

稜線しるき阿夫利連山

翠

陶工の藍いさぎよき破れ衣

紀

髭の武者絵を風を描きぬ

二

渦なして落花舞ふなり長屋門

孝

小川の堤つたふ野遊び

郁

平成十年七月十五日 於 江東区芭蕉記念館

連衆 鈴木慎二 東郁子 椿紀子

岩垂景翠

歌仙「炎帝の」

篠原達子 捌

炎帝の息吹や満都掩ひたる

達子

夏越の茅の輪くぐる殿

路子

サラダにはパセリ・トマトを定番に

和子

おめめばっちり揺り籠の嬰

紀彦

天窓をのんのんさんの横切る家 けんのすけ

澄子

山粧ふと旅の広告

和

運動会フォークダンスの輪に入りて

和彦

触れて驚く君の柔肌

路彦

留守番にそっといれたる胸の内

路彦

期限いっぱい待ってください

彦

総裁は誰がなるかと諸外国

和彦

寒の鴉がカアカアと鳴く

澄彦

月に置くのっぺらぼうの雪達磨

路

下足の札を帯にはさんで

和

講釈の席はばらばら煙草盆

彦

ヘッドホンから漏れるボサノバ

路

「考える人」に花降るミュージアム

同

刺身のつまのいかり防風

和

銀色の上りの鮎を釣りあげし

澄彦

法螺ばっかりの爺の寸法

和

古備前を何でも鑑定団に出す

彦

日曜大工器用貧乏

路彦

練雲雀電線工夫籠に乗り

澄彦

女もすなる宇宙飛行士

和

口紅が逆様につく恥かしさ

彦

赤道越えて君のまぼろし

路彦

視聴率記録破りのW杯

和

穴惑ひする蛇つつく人

澄彦

絨月の野末に淡し酒酌まん

彦

夜長に放り出したスピノザ

澄彦

泣きたくて征きしにあらず知覧基地

彦

糖尿いまや亡国の患

路彦

コンピュータ夢も希望も打ち込んで

彦

シルバーパスで名所旧跡

路彦

満開の花に微笑む磨崖仏

彦

茶摘の唄の遠くひびける

彦

平成十年七月十五日 於 江東区芭蕉記念館

連衆 倉本路子 式田和子 菅原紀彦

おおたけんのすけ 八角澄子

歌仙「入道雲」

豊田好敏 捌

富士筑波入道雲の生まれけり 好敏  
 初蟬らしと仰ぐ街路樹 蓉子  
 ファックスの機種と比較も思案して久美子  
 トランプカード手つき鮮か 泉子  
 帆船の舳先にかかる月の影 政志  
 色なき風に羽織る一枚 佐紀子  
 角伐に觀光客の群りぬ 美  
 人違ひから結ばれし縁 志  
 浮気虫と嫌はず顔を出し 美  
 ファーストフーズ昼の食卓 紀  
 『運命』の終章重く響ききて 蓉  
 力不足と首相しはぶく 志  
 ブラジルのサッカーファン涙月 蓉  
 飛行機越ゆるマツトグロツソ 泉  
 わくわくと通販できし未知の国 美  
 宗派を問はず読経に行き 泉  
 花篝見慣れし人と交はず笑み 美  
 過ごしてほのと雛の白酒 蓉  
 農協ももづく畠で富つくり 志  
 クローン研究豚も登場 紀  
 弱法師の見ることを拒み見る世界 蓉  
 錦眼鏡を子等と取りっこ 美  
 いづくかにタイムカプセル埋めた筈 紀  
 水虫だとして治すひと吹き 美  
 河童忌に禿を気にせぬ友と酌み 志  
 押されどうしで遂に陥落 美  
 老いてなほはまりて抜けぬ女装趣味 敏

ホモの夫婦を親に持つ嬰

紀

窓越しに水屋を照らす望の月 泉  
 路地に秋刀魚を焼く煙ゆく 蓉  
 二科展も軽い気持ちで挑戦し 泉  
 十年はもつパスポトとる 同  
 駄菓子屋は養子が継いでくれるとや 蓉  
 細巻たばこ奨むのどらか 泉  
 修道女ミサの帰りを花の宴 敏  
 春灯に書く便り敦通 紀  
 \*南米の大森林地帯

歌仙「蓮咲く」

原田千町 捌

蓮咲く額 田王現れませよ 千町  
 広袖を透く水無月の風 和代  
 コンポット・コーヒーゼリー匙添へて 碧  
 廊下を駆ける子等の足音 一恵  
 開かれし凶鑑を照らす玉鏡 千寿子  
 蓑虫ひとつ垂れる糸先 世止彌  
 初獵の銃の手入れに余念なく 代  
 髪染めし娘のバイク便来る 碧  
 フランスの映画シーンを真似べーぜ 寿  
 文明開化は民主化 彌  
 鑑定も流行りでけふも蔵の中 恵

鬼太郎の着たちゃんちゃんこかな？

寿

月影にアルペンスキーくつきりと 代  
 曲はバロック小さき聖堂 碧  
 核実験再び三度をののきぬ 彌  
 塩をきつめに握るおむすび 代  
 花の坂御車返し今盛り 碧  
 巣立ち促す親鳥の声 恵  
 メーデーにキャラクターグッズ抱いて行く 同  
 百円ショップに客の群る 寿  
 突然の雷に打たれて悩み失せ 彌  
 蝮酒酌み誓ふ兄弟 碧  
 戦場へ私を捨てて逃げた男 寿  
 甘くきはどい愛の留守電 碧  
 クルーザー遊びの予定びっしりと 代  
 宝の箱が掛る釣竿 恵  
 十六年夢だ夢だの名台詞 代  
 青道心の地藏会に月 恵  
 野良猫もグルメで肥る漸寒に 代  
 深き庇に柿を干しをり 碧  
 年末の賞与うらやむ自営業 寿  
 雪の隧道先は大都市 彌  
 早々と呆けるが勝ちと笑ひ合ひ 代  
 形状記憶のシャツを洗濯 碧  
 遠近法花の並木を描き取る 町  
 春の山脈揺蕩の奥 彌

平成十年七月十五日 於 江東区芭蕉記念館  
 連衆 長崎和代 松本碧 山崎一恵  
 紺野千寿子 佐藤世止彌

上月 淳子

最初に短詩型文学に惹かれたのは、私の父が古風な人間で、「女は何かの時に歌の一つも詠めなければ」と短歌を習うことを奨めた時に始まる。佐々木信綱先生の熱海西山へ疎開される最後の弟子として、本郷西片町へ伺い、半紙四つ折に綴じ墨で書いた詠草をお目につけて、朱を入れて頂き、暗い坂道を急ぎ足で帰ったことは忘れられない。その後、西山へすっかり引きこもられてからは、高弟であり「心の花」の重鎮であった(その後お考えがあって「心の花」からは離れられたが)伊藤嘉夫先生に短歌を見て頂いた。そして戦後、先生のお勧めで跡見専攻科の文科へと進学した。そこで、万葉集、古今集、新古今へと近づき、中でも西行の「山家集」に惹かれた。まだ連句の存在も知らなかった。でも戦後自由にも勉強出来るようになり、跡見時代は我ながらよく学び遊び、楽しい青春だったと思う。「虫めづる姫君」(「堤中納言物語」)の影印本で、始めは一字も読めなくてどうしようも思ったのが、学年の終りには、たどたどでも読めるようになったこと、国歌大観の重たい本を図書館から借り出して、夏休みのレポートを仕上げたこと等、思い出は尽きない。その後も短歌を作ることは細々と続けてい

たが、結婚、地方への転勤と、生活の百八十度の転換で、いつの間にか作歌とは縁遠くなくなってしまった。この間も、東京一名古屋一熊本一防府と慌しく動き、子供がいなかったせいもあって、若い人のクラブのような家の暮しとなってしまう、結構それを楽しんで過ごしていた面もある。

昭和四十二年東京へ帰り、友達に誘われ、「風花」主宰の中村汀女先生に師事し俳句を始めた。それには一つのきっかけがあった。何の本で読んだか今ではもう思い出せないが、蕪村の「お手討の夫婦なりしを更衣」の句に出会い、私が下手な解釈をするまでもなく、この句は不義はお家の御法度とお手討になっても仕方なかった二人が、誰の情か市井に逃れ、無事に更衣をして暮らしているという意味で、軒の釣忍までも目に浮かぶ様で、あったた十七字でこんな短編小説の様なことが言える俳句とは何とすこいものだろうと思っただのが、一つの下敷にあり、それがその時は思いも寄らなかった連句へと、私を導いてくれた様な気がする。

その後また熊本へ転勤となり、今度は長くて七年間「風花」熊本支部で句を勉強し、その間も私は写生句より人事句が好きであった。

そして帰京し、今度はもう転勤はないと決まり、落ちついて何かをと思ひ、汀女先生はお弱りになってもう見ても頂けず、さりとて

下手ながらも続けて来たものへの愛着もあり、朝日カルチャーの単発の講義を聴きに行った。前述の伊藤嘉夫先生の卒業生を集めての万葉集の集りにも出ていた。

カルチャーで次はどれが面白そうかと眺めていた時、ぱっと目に飛び込んで来たのが、「連句入門」の文字であった。連句については何も知らず、中世の連歌が、後世に至り、僧侶町人等の間でも行われる様になり、芭蕉に至って完成した位にしか分らず、知っているものと言え、他の物語にも引き合いに出される「ときは今天が下知る五月哉」位。知らぬが故の好奇心もあり、住友ビル四十八階のカウンターで、「これ本当に入門ですか」等と質問し、係の方の「古い方もいらっしやいます、俳句をしていらしたら大丈夫ですよ。皆様結構楽しそうにしていらっしやいます」との言葉にすがる、その日に早速手続きをして帰った。

それから「芭蕉の恋句」や「連句入門」を、読み直したり、「芭蕉七部集」を買って読んだり、附焼刃の勉強をして、十一月の開講を待った。

これが私が連句にのめり込んでいくきっかけであり、東明雅先生という名伯楽の優しくもきびしいお教えとの出会いであった。

それから十五六年の月日が流れ、不勉強ながら一所懸命先生の後について走り、此の度光栄ある宗匠の位を許されることになった。

英語連句の試み 花鳥風月(7)

浅賀淑代

秋は月。今年の名月は、雲に隠れてしまつて拜めず残念でした。仲秋の名月、英語では "harvest moon" が相当します。秋分のころの明るく大きな月は、穀物(harvest)を豊かに実らせるといふ伝承があるそうです。そう言えば、団子や芋、枝豆をお供えする日本の風習とも通いますね。因みに無月は moonless ではあつても "clouded moon" という表現の方が英語としてはしっくりいくようです。

ところで、脇起二十韻「ねこの子」は、前回、ウ3句目まででした。

ウ2 葡萄を摘むやうにキスして パトリシア

ウ3 月光ゲにふたりの肌の冷まじくツネー

今回、付けと英訳を試みて下さいましたのは菅原紀彦さん。中央大学連句会の学生さんです。三句お寄せ下さったうち、次の句を。

ウ4 忍びの道を説きし巻物 紀彦

a scroll telling  
the field of Ninja Norihiko

恋のからみから一転。うまい逃げですね。

「辞書を何冊も傍らに、終わるはずのない言葉探しをするのは楽しくもありました。」との嬉しい添え書き。フレッシュな刺激をいただき私も訳を試みました。

skills of Ninja

written in this scroll

紀彦さんの a scroll を this scroll として眼前のものに。句に実感が出てくると思いますが、いかがでしょうか？

さて、ウ5は、イヨン・コドレスクさんの付け。イヨンさんは、ルーマニアの詩人・画家。俳句雑誌『アルバトロス』の編集・発行人。連句にも三年ほどのキャリアをお持ちです。今夏、日本に一か月滞在。ご一座された皆様もおありかと思えます。現在、ルーマニアのハイク人口は、7〜80人、連句人は7〜8人と話しておられました。今後のご活躍を期待したいと思います。

ウ5 even for slippers  
the taylor prefers

silk and sati n lon

(仕立屋はスリッパまでも繻子シルク／紀彦訳)  
忍者にスリッパの付け。仕立屋は忍者の仮の姿でしょうか。

和訳は、紀彦さんの試み。原句の「S」の韻の効果を「仕立屋」「スリッパ」「繻子」「シルク」と生かして畳み込み、滑稽さを表して巧みな訳です。

ウ6は、近藤クリスさん(AIR)に付けていただきました。

ウ6 the luxury liner

enveloped in a snow storm kris

(豪華客船雪に包まれ／拙訳)

大景への転じ。一巻が大きく動きます。

次回は名残の折。皆様、よろしく。

\* 連句と酒 \*

「贅酒」

蒲原 志げ子

「酒は一種の麻薬です」

日本には麻薬がなかった。人間の状態を異界へ向かわせる様な媒介が酒だけであった為、神がかりになるのは酒しかなかった。日常から非日常へと飛躍させる役割は酒以外無かった。飲んで頭が冴えてくるとは生理的に無いらしいが、ある程度飲み、そこで止めておく、これが最高。個人差はその人の体験により、失態の積み重ねで覚える他ないらしい。煙草にも似た所があるが、失態は起こらない。精神集中のテクニックとして、この二つが愛用された。この力を借りて、どれ程の創作がなされたか、濁酒を賢人、清酒を聖人と呼んだ万葉人、贅酒歌にみる大伴旅人達の声が聞こえる。

これは我が姪で、アル中問題で今や権威の女史の説。彼女新聞の連載や講演で忙しいが、斗酒なお辞さぬ酒豪ときている。又、近々誘いがききそうでおダを聞かされること必定。

猫養会案内

▽『猫養作品集Ⅹ』作品募集

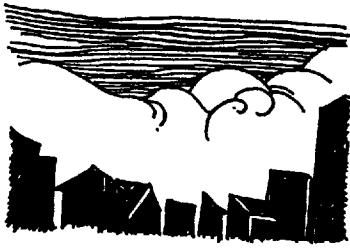
- 形式は自由
- 一人一篇（捌きは猫養会員のこと）
- 原稿用紙は必ずB4判で
- 締切 十一月末日
- 送り先

〒二七七一〇〇五

柏市加賀二一二十一 梅田 利子宛

▽猫養会初懐紙

- 日時 平成十一年一月二十日（水）  
十二時より歌仙興行
- 場所 江東区芭蕉記念館



石沢 無腸

杉内 徒司

埼玉県寄居町に石沢無腸さんを初めてお訪ねしたのは昭和四十四年七月十一日。

『昭和二年のある日、勤めていた男衾小学校の裏の煙草屋にゆくと、座敷の真中に立派な老人が坐っていた。それが茂木秋香翁であったが、お前さんも俳諧でもやらないかというので入門したのが、この道へのきっかけとなった。

秋香翁は深谷市矢島の産で、名実ともに大尽の旦那で、連句の実力では当時天下に敵なしといっても言い過ぎではないと思う。翁が昭和十六年十二月三十日に七十九歳で亡くなった後は、高崎の中村竹郵先生に指導をうけた。先生亡き後は連句にも遠ざかっていた時、根津芦丈翁から「秋香さんも竹郵さんも亡くなって淋しかろう、またはじめては」と誘いをかけられて、芦丈翁の門にはいった。翁もまた連句の実力者としては類い希な師匠であった。昭和二十二年から四十三年二月、九十五歳で亡くなるまで師事した」

連句千余巻の実作者であり、すっかり私淑して仕舞った私は、松本市の明雅さんを誘って無腸庵を昭和四十六年一月七日訪ねた。そ

れ以後二人で伺っただけでも五回にもなる。無腸さんの人格にも傾倒した私は、無腸さんに春秋庵を嗣いで貰いたいと思うようになった。昭和四十七年四月一日、十三世鈴木保雄が死去されたが後を嗣ぐ人がいなかったからだ。

それを是非実現させたいと思ったのは、二十年勤めた県会議員を来年の五十年四月で止めると無腸さんから直接伺った時だった。

春秋庵の門流は関東地方に多い。四世碩布は毛呂の人。五世逸淵は尻玉。九世有柳は武蔵川角出身。つまり、いずれも国鉄八高線沿線出身で、今も春秋庵門流が周辺に散在しているのも八高線沿線居住の無腸さんに地縁ありと思ったりした。

しかし無腸さんは襲名をうけなかった。

昭和五十年五月五日、地元の俳句の門下生により男衾の不動寺に左の句碑が建てられた。

花冷に籠りて過去は思ふまじ

尚現在連句界で活躍している森三郎氏は無腸が指導した吟啄会の高足である。

無腸さんは昭和五十三年七月二十二日八十歳で死去。八月三十日、寄居町町民葬執行。会葬者千余人。

私ども明雅、徒司、根津忠二は氷柱のそばの席で深悼。

